

第57回試験研究成果発表会（野菜Ⅱ）発表概要

【日時】令和元年11月26日（火）13:00～16:30

【会場】千葉県長生合同庁舎 大会議室（茂原市茂原1102-1）

発表1 成果発表（13:10～13:35）

無加温ハウスを利用した夏ネギ栽培法

東総野菜研究室 町田 剛史

競合産地が少なく単価が安定している5月どり夏ネギについて、既存の無加温ハウスを有効利用して、最も高い単価が期待できる5月上旬から収穫する栽培方法を紹介します。適期に播種・定植して、かん水で土壌水分を維持し、2月上旬から追肥・土寄せを計画的に行うことで5月上旬からの出荷が可能です。



ハウス夏ネギ栽培

発表2 成果発表（13:35～14:00）

土壌消毒と緑肥を組み合わせたネギのネコブセンチュウ防除体系

東総野菜研究室 中村 耕士

千葉県内のネギ産地では、ネコブセンチュウが原因と思われる連作障害が増加しています。対策として土壌消毒が行われていますが、コストや労力面からその回数を減らす取組が必要です。そこで、土壌消毒の回数を減らし、対抗植物との輪作を組み合わせたネコブセンチュウの防除体系について実証試験を行いましたので、結果を紹介します。



夏秋まき緑肥導入区（左）と連作区（右）

発表3 成果発表（14:00～14:20）

水田を利用したネギ栽培における課題と対策技術

東総野菜研究室 町田 剛史

県北部において、大規模な営農組合等が水稻の余剰労力活用として、秋冬どりネギの導入に取り組む事例が見られます。そこで、水田輪換畑においてネギ栽培を行う上での課題を明らかにし、排水対策や秋冬期に計画的に出荷できる技術の実証を行いました。



もみ殻暗渠の施工

発表4 成果発表（14:20～14:45）

所得確保のために水田へ野菜の導入を検討してみましょう
～水田ネギ作導入の事例から～

研究マネジメント室 高橋 ゆうき

水田経営体が野菜部門導入により収益を増加させるために必要な条件を、現地事例から整理し紹介します。また水田でのネギ作では、天候や排水性等により畑地に比べて収量が低下する場合がありますが、試算によると所得確保のためには収量は秋冬ネギ 330～360 ケース/10a、夏ネギ 300 ケース/10a 以上が必要です。



水田作ネギの栽培風景

休憩（14:45～15:00）

発表5 成果発表 (15:00~15:25)

量管理的手法を用いたヤシ殻培地耕による長期多段どりトマト栽培

野菜研究室 木村 美紀

軒高2m程度の慣行ハウスでの長期多段どりトマト栽培に取り組み、35t/10aの収量を得る栽培方法を確立しました。トマトの葉をコンパクトにする草勢管理ができる量管理的施肥方法とヤシ殻培地耕を組み合わせ、多収となる適正な栽植密度、生育ステージごとの施肥量などを明らかにしました。



慣行ハウスで35t/10aどりを達成

発表6 成果発表 (15:25~15:50)

キュウリの土耕・培地耕交互栽培に適した冬期のかん水同時施肥法

野菜研究室 矢内 浩二

キュウリの周年栽培において、養液栽培の欠点を改善し、大規模経営に向く栽培法として、夏期のヤシ殻培地耕と冬期のかん水同時施肥による土耕を組み合わせる土耕・培地耕交互栽培を開発しました。この栽培における冬期の施肥量や土壌線虫防除の必要性について明らかにしたので紹介します。



土耕・培地耕交互栽培

発表7 成果発表 (15:50~16:10)

施設果菜類に発生するコナジラミ類に有効な防除薬剤

病理昆虫研究室 福田 寛

県内の施設果菜類栽培地帯で採集したコナジラミ類に対して、各種殺虫剤の効果を検定しました。その結果、全ての個体群に高い効果を示す薬剤、コナジラミの種類により効果に差がある薬剤、かつて有効であったものの現在は効果が低下しつつある薬剤などがわかりましたので、報告します。



オンシツコナジラミ (上) と
タバココナジラミ (下)

発表8 情報提供 (16:10~16:25)

露地プール育苗 ~育苗ハウスを用いない「コシヒカリ」稚苗育成技術~

水稲温暖化対策研究室 鈴木聡史

露地プール育苗は、育苗ハウスを用いない育苗技術です。水を張ったプールを用いて露地で育苗管理するため、従来の育苗における灌水作業の省力化が可能です。「コシヒカリ」稚苗を育成する場合、3月26日~4月1日に播種し、ポリプロピレン製不織布2枚がけで露地プール育苗を行うと、4月20~25日に移植可能な稚苗を育成できます。ここでは、実際に行う際の方法や注意点について紹介します。



露地プール育苗の様子